

校門を出たら、くまがいた。

どことなくまさにか気になるかい？耳が二つあって、目が二つあって、鼻と口が一つずつある顔の仔ぐまだ。あ、今のは冗談。全身はココアみたいな毛に包まれていて、お腹はぼっこりとしている。うつむき加減でもわかる黒くてつぶらな瞳をしているそいつは、体に入っていないというか、関節がないみたいだった。そう、まるでテディベアだ。

横を通りすぎるときに、ピクツと動いてたから生きてるくまだ。何をしたいのかわからないが、校門というものには似合わないこの動物は退屈そうに体育座りをしていた。私はくまにかまうことなく、道の真ん中で行く先を考えていた。

「ねえ、君。道に立って悩んでる君。ヒマかい？ちよつと用があるんだ。」

すこし高めの声——声変わりする前の男の子みたいな声で私は呼び止められた。誰が呼んだのかわからなかったが、振り返ることにした。

そつと振り向くと、さっきのくまが私に向かって手招きをしている。くまが何の用だろうか、と思いつつ私は近寄っていった。

「ぼくはくま。退屈で暇で寂しいから、ここで座ってたんだ。でも、みんな忙しそうで、気づいても構ってもくれなくて。」

学校の前で遊んでもらおうと思っても無理だろ。そんなことを思いつつ、呼びつけて挨拶もせずに自己紹介するくまに、こちらからも自己紹介をすることにした。

「吾輩は猫である。名前はまだないと言いたところだが、残念ながらミケ太という立派な名があるんだ。何せ、見たどおりの三毛猫だからな。ところで、何故私を呼びとめた。」

一度は言ってみたかったセリフを言って、自己満足にひたっていた。しかし、くまくん

はきよんと私を見ている。少しばかり、格好をつけすぎたか。

「ふーん。おじさんの名前はミケ太なんだ。ついでに、僕の名前はフランセ。よろしく。えっと、退屈だったから呼び止めたんだけどね…そうだな…一緒に旅に出ない？」

どうやら、退屈をまぎらわすために私を呼んだらしい。そして、思いつきの旅をするのに巻きこみたいらしい。私を『おじさん』呼ばわりするし、困ったくまだ。

「フランセだかフィアンセだか知らないが、くまくん。それは」

「あつ、フランセの方です。ついでにフィアンセは恋人ってこと」

話を始めたのに、間髪入れずに訂正してきた。しかも、名前を直すときだけ丁寧語を使っていた。

「すまない、フランセくん。ついでに、私はおじさんではない。ミケ太だ。その旅についていくのはいいけど、行き先と行き方は決まっているのか。」

さりげなく『おじさん』を否定する。そして、旅について聞いたのは少なからず興味があつたからなのかもしれない。

「行く先は決まってる。海に行きたい。僕はまだ見たことがないから。行き方は、ミケ太さんわかる？」

海か。私もまだ見たことも行ったこともなかった。それでもわかることは、歩きの旅で行くことは難しいということだ。

「行ったことはないけど、電車なら猫とくまでもたどり着くことができるはず。でも、人間みたいな感じで切符を買って乗ることはできないから、もぐりこむしかないけど」

それを聞いて、フランセくんは満足そうにうなずいた。海に行きたいのは、思いつきではなかったようにみえる。

「それだったら決まり。ミケ太さんも準備があると思うから、そうだな、明日のこれくらい時間に集合しよう。」

どうやって行くのか決まらないうちに、出発時刻が決まった。見上げると、太陽は真上より少し東にある。よし、仕方がない。間に合うように行き方を調べておこう。

翌日、待ちかまえていたような晴空の下、私とフランセくんのお海への旅は始まった。初めての電車旅で知らない街へ行くことに不安を抱く私に対して、フランセは非常に嬉しそうな顔で私を待っていた。

「おはよ。僕が一番乗りだね。」

彼はどこで手に入れてきたのか、青と黄色のしましまになったリュックを背負っていた。中身を聞くと、寝るための毛布と木の実だそう。私の荷物はどうかといえば、何も持ってきてない。猫の大前提は身軽であることであり、最悪のときは残飯を食べればよいと思っっているからだ。

とりあえず、私たちは駅まで歩くことにした。私の縄張りの中にあるから、電車に乗る直前まで迷うことはないはずだった。おもしろい香り、かわいい花、白い蝶などなどにフランセくんがいちいち気をとられるものだから、まっすぐに進めなかった。おかげで駅に着く頃には、へとへとになっていた。こぐまだから仕方がないと思いつつ、

「フランセくん、旅の間のお願ひがあるんだ。それは、私と一緒に歩いてほしい。君の興味のままに歩くと時間がかかるし、はぐれたら帰れなくなるかもしれない。だから、これだけは守ってもらいたい。」

と、少し厳しく言った。旅には危険がつきものだから、仕方がない。それを聞いたフランセは、しばしの間しゅんとしていたが、

「はい。気をつけるよ。」

と元気に返事をした。

ホームの上には、たまに真夜中にくるからのぼり方は知っている。この水道は蛇口が緩いから水を飲むには最適だ。そこに、くまを引き連れてのぼっていくと、ホームには誰

もいなかった。改札の方に人影が見えただけで、二つ並んでいるベンチも空いていた。

昨日のうちに、知り合いにたずねてまわったから行き方と乗る電車は分かっている。一番近い大きな駅で乗り換えればいいのだ。

「ミケ太さんは、乗る電車とかわかるの？別の方向とか行ったりしない？」

全く私を信用していないのか、不安気にフランセは聞いてきた。「猫だからな。大丈夫よ。」と自信たっぷりに答えておく。

ホームに滑りこんできた下り電車には、行先に目的地の駅名が書いてあったので、「乗るぞ」とフランセに声をかけて乗りこんだ。

やはりというか、電車の中にも人はほとんど乗っていなかった。数少ない乗客も、電話をいじっていて私たちに興味を示してくることはなかった。それでも、なるべく目立たない場所で座っていることにした。

「この電車で、海までつくのかな」

窓の外を見ながらフランセは言う。すっかり説明を忘れていることに気づいた私は、これからの予定を説明した。

「今乗っているので近くの大きな駅まで行く。そこからは、幼なじみに道を確認して、海まで行ける電車に乗る。夜までにつけるはず。」

ふーん。そういつて私の説明に納得したフランセは窓から目をはなして、ちょこんと体育座りをした。両手でじゃんけんをして一人で遊んでいると思ったら、ふいに聞いてきた。

「そういえば、ミケ太さんはどうして昨日あの場所にいたの？」

それはこつちが聞きたい質問だ。それに、猫にそんな質問しても『自分の縄張りだからだよ』としか答えてもらえないであろう、普通の場合。

「あそこは高校だろ。学校っていうのは、意外といい場所だからな。」

親切な猫だと自分でも思う。今のは建前の理由しか言っていなかったけれども。

「そうなんだ。学校だったのか。人が多かったのもそれだからなんだ。」

私の答えを復唱するというか、自分自身に言うようにフランセはつぶやいた。

二人でそのような会話をしていると（正確には一匹と一頭の会話だが）あつという間に終点を告げるアナウンスが入って、駅についた。途中何度か電車が駅に止まって人が降り降りしても私たちが気に留める人がいなかったことに感謝しつつ、降りた。今度も改札を通らずにホームから脱出して、道路へと出た。

線路沿いをしばらく歩いて目印を見つけると左に曲がった。そこには、紺地を白く「そば」と抜いて作ったのれんとその下にはお昼寝中の黒とグレーのしまねこ。こいつこそが私の幼なじみだ。

「おい、マサ。元気か。私だ、ミケ太だ。」

フランセは私の横でポーツとしているので、とりあえず挨拶しなよと言っておく。

「おい、何だ。つてミケ太じゃん。超お久じゃね。いやーどうしたんだよ。」

マサは相変わらずだ。横のくまは、私とは正反対と言つてもいいくらいフランクな猫に目を丸くしている。

「君の噂をジョンに聞いてさ。それで、ここから海まで行く電車に乗りたんだけど、ホームまでの行き方を教えてもらえないか」

目をつぶって頭の中に地図を描いているであろうマサは少し見てておもしろかったらしく、フランセは声を出さずに笑っていた。

「そこんとこ左に曲がって進むと踏み切りがあるじゃん。あそこから二本目の線路を進んじやうとホームがあるわけよ。そこなんだね。そういえば、ジョンっち懐かしい。」

さすがそば屋のマサだ。思い出にひたりながらも的確な説明だ。よし、行き先もわかったし出発するか。

「ありがとな。助かったよ。」

そういうと、マサは照れたように

「別に、礼には及ばないしね。あつそのクマ公、ミケ太はどうだい？」

突然話をフランセに振った。

「しつかりしてて、いい猫です。」

フランセよ、何故に敬語で何故に上から目線なのだ。その答えにマサは「そうだろ」と言つて、また昼寝をはじめた。

彼のいう通りに歩いて、線路をすすんだ先には確かにホームがあつた。電光掲示板には最終目的地の駅名が書いてあるから、きっとここに違いない。しかし、ホームにはほとんど人がいなかったから少し心配になつた。

ホームの端の方に、若い女の人――黒くて長い髪、青いワンピースを着たきれいなお姉さんがベンチに座っていた。なんとなく、この人の近くならいかなと思つた私たちは、近くに腰をおろした。

しばらくしてホームにやってきた電車は、さつきと違って全体が水色で、ドアが少なかった。お姉さんに合わせて乗ると、中の椅子は何席ずつかで向き合っていて、これも窓沿いに長いすがあつたさつきの電車と違った。

「何だかよくわからないけど、海っていうか、盛り上がってきたね」

確かに何だかよく分からないけど、そんな気がしてきた。そうだ、これは旅なのだ。

プシュウという音とともに、ドアが閉まってゆっくりと電車が動き出した。あのお姉さんは本を読んでくつろいでいる。気に留めてなくてよかつたというか、構ってもらえずに残念というべきか。

少し時間がありそうなので、フランセくんに聞くことにした。

「そういえば、君はどうしてあの場所に？」

彼は建前でごまかすだろうか。それとも、何かあるのだろうか。

「はじめに言った通り、退屈だったから」

きつと私は納得できない顔に今なっているだろう。

「そう言っても、きつと納得してないでしょ、ミケ太さん。そうだな、待ち人をしていた。」なるほど。でも、そしたら私を呼び止めてよかったのだろうか。そう聞くと、

「待ち人よりも探し人かな。話がなくなるけど話す？」

うなずいた。私は聞きたかったのだ。

「えっと、僕はテディベア・ベアって言って何年か前に流行したペット用くまのうちのー頭。僕は当時小学生の男の子に飼われていたんだ。自分の家もあったし、一緒に遊んでくれたし、お出掛けもしたんだ。すごくいい人だった。だけど、ある日引越が決まって、一緒に行けないって言われたんだ。」

それからは、日本ペットベア協会の認定ベアに頑張っとなって、支援を受けながら放浪してきたんだ。あの場所は人が多いから見つかると思って座っていたんだ。」

ひとごとと思えないくらい、誰でもありうるけど大変なくま人生だ。

「じゃあ、私に旅を提案したのは…」

やぼかもしれない。でも聞いた。

「ちよつとでも行動範囲を広げて探すため。」

やっぱりか。なんてしみじみしていたその時だった。

「君たち、動物が電車に乗っちゃいかん。わしは、猫もくまも猿も犬も虎も乗客としては認めない。第一、切符を買ってないだろ、切符を。」

犬と猿と虎は関係ないぞと思っ返り返った。太つちよのおじさんが白いシャツと紺のズボンを着て、帽子をかぶりメガネをかけて立っている。たぶんこの人が車掌さんだ。私とフランセは顔を見合わせた。つまみ出されるかもしれない。絶体絶命、四面楚歌、万事休す。どうしよう、ピンチだ。

そのとき、あのお姉さんが本をぱたつと閉じて、すつと立ち上がった。そのまま、つかと車掌さんに歩みよって

「車掌さん、その子は私のくまと猫なの。必要ならば切符代を払いましょうか。」

ニコッと笑いかけて言った。車掌さんは、どうやら若い女の人に弱いらしい。「あ、あの大丈夫です。猫とくまも立派な乗客ですね。切符、大丈夫です。」と赤面しながら言って、次の車両へと歩いていった。

「猫さん。くまさん。迷子かもしれないし、旅の途中かもしれないけど、私と一緒に降りましょう。次の駅なんだけど、海と山のあるいい街よ。電車はあまりよくないとおもうからね。」

助けられてぼうぜんとしている私たちにお姉さんは話しかけてきた。

「海が見えるなら、降りた方がいいよね」

フランセは言う。確かにそうだ。行き先はただ海なのだ。行けるに越したことはない。そうしよう。ニャーと鳴いてうなずいた。

「礼儀正しいのね。偉い、偉い。じゃあ、降りる直前に声をかけるわよ。」

そう言って、お姉さんは本を読みはじめた。世の中には、車掌さんみたいなじわるもいれば、優しいお姉さんもいる。旅ってすごい。

しばらくすると、車内アナウンスが入り、お姉さんは私たちを呼びながら本をしまっていた。駅についてドアが開くと、お姉さんに続くように外へ出た。

改札を通過して外へ出ると、お姉さんは私たちに言った。

「右に行くと海。私が歩いて二、三十分くらい。あと、山は左に行った先で、私はこれから山に行く。どうする？」

親切にもらったのに申し訳ないけど、海に行くことにした。フランセが右をさす。

「そうなの。気をつけてね」

そう言って、私とフランスの頭をなでると山の方へ歩いていった。

私たちも海へ向かって歩き出す。すると、フランスが思い出したように、

「ミケ太さんが学校に行く理由の背景を聞きたいけど、話してくれる？」

そう聞いてきた。建前だと気づいたのだろうかと思った。

「私も君と同じ理由だ。人を探している。」

くまはうなずく。続きを、とでも言うような感じだ。

「生まれたすぐ後から、私は中学生の男の子に飼われていた。ミルクもらって、構ってもらって、実質的なお母さんみたいだったんだ。『ミケ太』の名前をつけてくれたのも彼だ。

ある朝起きると、家の中が空になっていた。物はもちろん、人も全員。唯一あったのは一日分のごはんだけだった。しばらくすると、知らない人がどやどや入ってきたから外へ出た。今考えてみれば、あれは夜逃げだった。

それで、彼を見つげるために学校をずっと探しているんだ。縄張りの外に出ることだつてある。」

フランスはため息をつくみたいに言った。

「ミケ太さん、苦勞してきたね。今まで僕が一番だと思ってきたけど」

そして、無言で歩き続けた。お互い言いたいことがあったかもしれないけれど、何も言わなかった。

「あつ海だ」

やっとしゃべったのがこの言葉だった。夕暮れ時の海は赤色をして、オレンジの夕日と溶け合っているように見えた。もう、水平線がわからなくなるほど、夕日はきれいだった。

夕日と猫とくまと海。きつと、一番きれいな組み合わせに違いない。

「旅先の夕暮れはきれいだね」

フランスがしみじみ言ったのに対して、私もしみじみとうなずいた。目に涙がにじんでい

たのかもしれない、太陽が広がって見えた。

日が暮れてから、波が届かなそうな砂浜の所にフランセが持ってきた敷物と毛布をおいて、寄り添うように寝た。たった1日の旅だけど過ごした時間の濃さは、今あるお互いの信頼とも言えるのだ。

夜の海辺にはただ波が行ったり来たりする音がした。夜空には、食べられそうな半月が浮かんでいる。月明かりが砂を照らしていた。

海鳥が鳴く声をきいて私たちが起きると、すでに日がのぼっていた。朝の海を楽しみたい気持ちは山々だったが、帰る方法を考えるのが先決だ。電車で帰ったら、今度は車掌さんにつまみだされるかもしれない。

結局、考えるのをやめて海辺で適当に歩いてきた。遠くの方から赤いスポーツカーが走ってきたと思ったら、目の前で急停車した。「朝から元気な車だね」とまだ半分寝ているようなフランセが言っている間に中から人が出てきた。男の人ともうひとり：あれ、昨日のお姉さんだ。

「あっ、やっぱり昨日の猫さんとくまさんだ。無事に海まで来れたんだね。マモル：」

お姉さんは横の男の人に話す。マモルって名前。何となく、私を飼っていた彼に似ているのだ。背も伸びて色々変わっているけど。

「ミケ太さん。あの人、僕が探していた人に似ているんです。何となく」

フランセは私をつつきながら言ってきた。

「実は、私の元飼主にも似ているんだ。」

私は言う。だとしたら、可能性は二つある。一つは、一般的な顔でどちらも他人の空似ということ。もう一つは：。そう思って私たちは同じタイミングで顔をあげていた。

「あっ、こいつ、ミケ太でこっちはフランセじゃないか。中学生の時と小学生の時に飼っていたんだけど、飼えなくなっちゃってそれから行方知れずだったけど：よかった。会え

し。」

そうか。私たちの元飼主は同じ人だったんだ。ずっと探し続けていた人が見つかった。

「まあ、さ。積もる話もあると思うから、君たちも車に乗って都会にあるマモルの家まで行かない？ 私たちもちょうど行く途中だったし。ね、いいでしょ、マモル」

黙ってうなずいた私たちは、お姉さんの開けたドアから車に乗りこんだ。マモルさんが発車させて、車が走り出すと海の景色がだんだん遠くなっていた。

このときはまだ、行く先が出发点である高校の近くだということを私たちは知らなかった。